

生活者としての外国人保護者のための学校文書研究

李曉燕（九州大学共創学部 准教授）

日本の学校教育においては学校文書の配布が、学校と保護者との主要なコミュニケーション手段となっている。学校文書の読解は、言語力を超えて、日本社会で生き抜く能力の範疇に入ると言える（李, 本田, 2015）したがって保護者への支援では「文字の理解力・読解力」の養成が、会話以上に重要である。しかし、従来、地域の日本語教室では、会話の指導・支援が中心とされてきたため、「文字を読む」ための支援に必要な教材があまりない。ことに「学校文書」については、どのような種類のプリントが配布され、どのような内容が、どのような文章表現で書かれているかが日本語教育の視点から調査・研究されたことはほとんどない。

継続助成期間中、1) 保育園・小中学校で発行される学校文書を収集し、これまで構築した「学校お便りコーパス」を発展させ、200万字超えた「学校文書コーパス」へ拡張した。2) 事例研究の手法によって、文書の記述に含まれる隠れたカリキュラムを含む学校文化について検討した。3) 量的分析の手法により語彙や文型の使用頻度や共起関係を明らかにして、学校文書を読むための教材作成に必要な語彙・文法に関する準備を整えた。本研究で構築した「学校文書コーパス」は、本調査研究に活用するだけでなく、ウェブサイト等で公開し、他の日本語教師や研究者にも提供する。つぎに、その成果を受けて「学校文書を読むための日本語教材」を作成する。

まず、2016年から2018年にかけて、大阪・福岡・石川・埼玉・神戸の小中学校、大阪・福岡の中学校、および石川の保育園から、合計1594枚の学校文書を収集した。それをテキストデータ化し、これまで構築した810枚の学校プリントのコーパスと合わせて、200万字超えた「学校文書コーパス」を構築した。また、他の日本語教師や研究者にも活用してもらえるよう、ウェブサイト (<http://lixiaoyan.jp>) で公開している。さらに、より簡単に利用してもらえるように、「検索」機能を追加してダウンロードせずにオンラインでもコーパスの利用が可能となった。

次に、学校文書を量的・質的分析法により、母語話者の保護者が気づかない学校文化や隠れたカリキュラムを明示化した。隠れたカリキュラムは、子どもが暗黙的に身につける経験の総体である。外国人保護者は日本の初等教育を経験したことがないので、隠れたカリキュラムに対する理解が非常に困難である。本研究で考察した平等主義の教育、長い導入と動機付けの優先主義、学習習慣・態度の形成、集団や仲間関係の重視、型から心へのアプローチといった、日本の学校の「隠れたカリキュラム」の視点から、学校文書の文面およびその裏にある文化的なものを、明示的知識として伝える必要がある。

続いて、教材化作業の準備として、さらに以下の量的調査と考察を行ってきた。1) 特に日本の学校文化を反映する「学校カルチャー語彙」の理解度調査を行い、外国人保護者にとって理解が困難な要因を分析することで、日本の学校カルチャーにおいて外国人への伝達をもっとも難しい部分が明らかにした。2) 初級・中級日本語教室で習っている92の文型をピックアップし、BCCWJと対照しながら「学校文書コーパス」における基本文型の頻度を調べた。それに基づいて、学校文書を読むための教科書を作成する。

学校教育の中では、目標を踏まえ、各教科及び領域ごとに綿密な教育計画が立てられている。このような、目に見える形で意図的・計画的に行われるカリキュラムはもちろん、目に見えず暗黙の了解の形で児童生徒に伝達される隠れたカリキュラムは、外国人保護者への日本語支援のポイントになる。本研究の成果は、言語文化の交流と影響に関する国際シンポジウムで発表した。ジャーナル「地球社会統合科学」および「留学生交流・指導研究」に掲載された。

これまでの研究で明らかにした学校文化と隠れたカリキュラムを反映する内容とともに、コーパス分析の手法により語彙や文型の使用頻度や共起関係を利用して教材を作る準備を続けている。教材は来年までに出版される予定である。